

検査項目・用語の説明

検査用語集はスマートフォンからも
ご確認いただけます。



心電図	
うじくへんい きじくへんい 右軸偏位・左軸偏位	正面からみて右に心臓が傾いて位置している状態を右軸偏位、左に心臓が傾いて位置している状態を左軸偏位といいます。健康な人でも体型の影響によりみられる場合があります。
きがいしゅうしやく 期外収縮	最も多くみられる不整脈の一種で、心臓が本来の調律(タイミング)を外れて早く収縮するものを指します。心房から異常な刺激が生じた場合を上室性期外収縮、心室から異常な刺激が生じた場合を心室性期外収縮といいます。過労やストレスなどにより健康な人でもみられる場合があります。
うきやく 右脚ブロック	右心室を収縮させるための刺激を伝える道である右脚が障害された状態です。完全に障害されているものを完全右脚ブロック、一部障害または伝導時間が延長している状態を不完全右脚ブロックといいます。健康な人でもしばしばみられます。
さきやく 左脚ブロック	左心室を収縮させるための刺激を伝える道である左脚が障害された状態です。右脚ブロックと違って心筋に著明な変化がみられるときに発生します。
ぼうしつ 房室ブロック	軽症から重症へⅠ度、Ⅱ度、Ⅲ度と大きく3つに分類されます。軽症の場合は治療の対象となることはほとんどありませんが、重症になると著しい徐脈となり、失神や心停止などの発作がおきる場合があります。その場合はペースメーカーの植込みが必要となります。
しょうこうぐん WPW症候群	正常の刺激を伝える経路の他に、先天的に存在する副伝導路により刺激が伝わっている状態です。通常は心配いりませんが、ときに発作性の頻脈症をおこす場合があります。
えんちよう QT延長	心室の興奮から回復に時間がかかっている状態で、心臓の収縮力が低下していることを表しています。心筋疾患、代謝疾患、脳血管疾患、薬剤の影響でみられる場合があります。
どうせいじよみやく 洞性徐脈	通常より心拍が遅い状態で、心拍数が44/分以下の状態です。ペースメーカーの適応になる場合があります。健康な人でも、運動で鍛えた方(スポーツ心臓)にもみられることもあります。
しんぼうさいどう 心房細動	心房が不規則に細かく震えている状態です。心房の収縮・拡張が正しくできないため、心房から出る血液量が減少します。心房細動自体は危険な不整脈ではありませんが、心房内に血栓ができやすくなり、脳梗塞を合併するリスクがあるため、治療が必要となります。
ていでんい 低電位	粘液水腫、心のう液貯留、収縮性心膜炎などでよくみられます。健康な人でも、体格が小さい場合や心臓が小さい場合にみられることもあります。
こうでんい 高電位	心臓が大きい場合や、心臓の壁が厚くなっている場合などでみられ、高血圧や心筋症・弁膜症などの心疾患が原因となっていることがほとんどです。健康な人でも、運動で鍛えた方(スポーツ心臓)でもみられることもあります。
いじよう は 異常Q波	心筋梗塞の際にみられる特徴的な波形ですが、体型(やせ型)や心臓の傾きなどによってみられることもあり、病的に問題のない場合もあります。
はぞうこうふりよう R波増高不良	R波といわれる部分が通常より低くなっている状態で、心筋障害、心膜炎、肺気腫などでみられます。健康な人でも、体型(肥満型)や心臓が小さい場合にみられることがあります。
いじよう じょうしよう ST-T異常 (ST上昇、ST ていか へいてい いんせい 低下、平低T、陰性T)	心筋の虚血や障害を意味し、その状態によって波形の形状は変化します。主に狭心症や心筋梗塞、左室肥大などの心疾患に起因するものや、電解質異常の場合でもみられます。

眼底

にゅうとうがんおうかくだい 乳頭陥凹拡大	視神経線維の数が減っている可能性があり、緑内障の疑いがあります。ただし、生まれつきや強い近視でもみられる場合があります。
おうはんへんせい 黄斑変性	網膜の中心にある黄斑という組織が、加齢などにより障害を受け、様々な変化がおきている状態をいいます。進行すると、視覚機能(視力や視野)が低下します。
ドルーゼン	眼底に見られる黄白色の斑点です。加齢現象の一つで硬性白斑との識別が必要です。

眼底	
コーヌス	視神経乳頭に接して三日月状又は輪状に現れる網膜・脈絡膜の薄くなっている部分です。
どうみゃくこうかせいへんが 動脈硬化性変化	眼底の動脈が硬化すると、血管が白っぽく光って映し出されます。さらに進行すると、硬化した動脈の影響により、そばにある静脈が細くなったり途切れたように見えている状態をいいます。
こうけつあつせいへんが 高血圧性変化	眼底の動脈が狭くなり、太さがふぞろいになっている状態をいいます。
しゅけつ はくはん 出血・白斑	眼底出血とは網膜表面の血管が破綻・閉塞することでおこる網膜の出血をいいます。原因は様々ですが、糖尿病・高血圧・腎臓病などで多くみられます。白斑とは眼底にみられる白い斑点で、硬性白斑(出血や血管から血液成分がもれて固まったもの)と軟性白斑(神経線維の一部が腫れたもの)に分けられます。
はくないしょう 白内障	水晶体が灰白色や茶褐色に濁る病気です。水晶体は主にクリスタリンという蛋白質でできていますが、この蛋白質が変性することによっておこります。原因としては加齢によるものが最も多く、他に先天性のものや紫外線・糖尿病などが原因でおこる場合もあります。

血液検査	
はつけっきゅう 白血球	血液に含まれる細胞成分で、体内に侵入した細菌などの異物を自分の中に取り込み、分解処理することで、体を感染から守る重要な役割をしています。炎症や感染症の場合に増加します。白血球は働きや形により5種類(好中球・リンパ球・単球・好酸球・好塩基球)に分類され、その割合を調べることで診断に役立てることができます。
せつけっきゅう 赤血球	血液の主成分で、体の各部の組織細胞へ酸素を運び込み、二酸化炭素を運び出す働きをしています。高値の場合は多血症や脱水状態、低値の場合は貧血や出血などが疑われます。
ヘモグロビン	赤血球に含まれる蛋白質で、酸素の運搬を行っています。低値の場合、貧血などが疑われます。
ヘマトクリット	血液中の赤血球の割合を容積比(%)で表しています。貧血の場合、低値となります。
MCV (平均赤血球容積) MCH (平均赤血球色素量) MCHC (平均赤血球色素濃度)	赤血球の一つ一つの大きさやヘモグロビンの量、濃度を計算したものです。貧血の種類や程度の診断に役立てることができます。
けっしょうばん 血小板	出血を止める重要な働きをしています。高値の場合血栓ができやすくなり、低値の場合出血しやすくなります。
フィブリノーゲン	血液の凝固反応に作用する物質です。低値では出血傾向、高値では心筋梗塞や脳梗塞などの危険因子となります。

肝機能・肝炎	
せう 総ビリルビン	肝炎・肝硬変などの肝臓の病気や胆石・胆道の腫瘍などにより胆汁の流れが悪くなる場合に高値となります。
AST (GOT)	心筋、骨格筋、肝臓、腎臓などに多く存在する酵素です。これらの臓器に異変がおこると高値となります。
ALT (GPT)	肝臓などに存在する酵素です。肝炎・脂肪肝・肝硬変などで高値となります。
ALP	骨、肝臓、腸などに多く存在する酵素です。特に肝・胆道などの疾患で高値となります。
LD	ほとんどの組織・臓器に存在する酵素です。急性肝炎・肝臓その他の臓器の腫瘍・白血病・心筋梗塞などで高値となる場合があります。
γ-GT	肝臓などに存在する酵素です。肝・胆道系疾患で高値となり、特にアルコール性肝障害で著しく上昇します。
せうたんぱく 総蛋白	血液中の蛋白質の総量で、栄養状態と肝・腎機能の指標になります。
アルブミン	総蛋白に含まれる蛋白質の一種です。肝臓でつくられるため、肝臓に何らかの障害があると低下します。
LAP	肝臓や膵臓・胆道などに多く存在する酵素です。肝臓・胆のう・胆管などの疾患で高値となります。
にょう 尿ウロビリノーゲン	健康な方でも尿中にわずかに存在し、強陽性(2+)や陰性(-)の場合、肝障害や胆道系の疾患が疑われます。
コリンエステラーゼ	肝臓で作られる酵素の一種です。肝臓の細胞に異常が生じると血液中の量が増減します。糖尿病や脂肪肝で高値となり、肝硬変や慢性肝炎で低値となります。
こうげん HB s 抗原	B型肝炎ウイルスの感染を調べる検査です。陽性の場合、B型肝炎が疑われます。
こうたい HB s 抗体	陽性の場合、B型肝炎ウイルス感染の既往を示します。陽性であっても抗原が陰性なら心配いりません。
こうたい HCV 抗体	C型肝炎ウイルスの感染を調べる検査です。陽性の場合、C型肝炎が疑われます。

腎・尿路系	
尿蛋白	血液中の蛋白が尿に出たもので、健康な人でも運動やストレス、発熱、生理の前後などで一時的に陽性となる場合があります。数回検査しても陽性の場合は、腎疾患などが疑われます。
尿潜血	尿中の血液を検出するもので、腎・尿路系の炎症や結石・腫瘍などで陽性となります。女性の場合、生理中や生理の前後に影響を受けやすいため、検査は生理の期間を十分に避けて行う必要があります。
尿沈渣	尿を遠心分離し、その沈殿物を顕微鏡で観察する検査です。どの成分が増加出現しているかによって、疾患を予測することができます。腎炎や膀胱炎では赤血球や白血球が高値となります。
尿素窒素	血液中の尿素(老廃物)の量で、腎臓の排泄機能低下にともない高値となります。脱水や高蛋白食でも高値となります。
クレアチニン	血液中の老廃物の一種です。腎臓の排泄機能低下にともない高値となります。
eGFR (推算糸球体濾過量)	腎機能評価の指標とされる数値です。腎臓の働きが悪くなると、低値となります。

脂質代謝・糖代謝	
総コレステロール	消化液やホルモンなどをつくる原料となる物質です。身体にとって必要なものですが、余分に摂りすぎると動脈硬化を引きおこし、狭心症・心筋梗塞・脳梗塞などの原因となります。
中性脂肪	皮下脂肪の主成分であり、エネルギー源として利用されます。高値の場合、動脈硬化や肥満を引きおこす危険性があります。アルコール・糖分の摂りすぎ、運動不足、体重増加などで高値となります。
HDL コレステロール	善玉コレステロールと呼ばれ、血液中の悪玉コレステロールを回収する働きがあります。そのため、増加すると動脈硬化の進行を予防し、減少すると動脈硬化を進行させます。
LDL コレステロール	悪玉コレステロールと呼ばれ、増加すると動脈硬化を進行させます。
non-HDL コレステロール	総コレステロールのうち、HDLコレステロール以外のすべてのコレステロールのことを示し、動脈硬化の指標の一つとされています。
血糖	血液中の血糖値を調べる検査です。高値の場合、糖尿病が疑われます。食後経過時間によって「空腹時血糖(食後10時間以上経過)」「随時血糖(食後3.5時間～10時間未満)」「食直後血糖(食後3.5時間未満)」に分けられます。
HbA1c	過去4～8週間における血糖のコントロール状態を調べる検査です。
尿糖	血液中のブドウ糖が尿中に出てきたものです。血糖が高い場合や、腎臓の病気で再吸収がうまくできなかった場合に陽性となります。

血清学	
RF	関節リウマチで高値となります。ただし、健康な人やリウマチ以外の疾患(膠原病・慢性感染症・肝疾患など)でも数値が上昇する場合がありますため、高値というだけではリウマチと断定できません。
CRP	身体に何らかの炎症がおきている場合に高値となります。

膵・電解質・その他	
血清アミラーゼ	膵臓や唾液腺から分泌される消化酵素です。膵炎・唾液腺炎で高値となります。
Na・K・Cl・Ca	血液や体液に含まれ、体内の水分量やpHの調整、神経伝達や筋肉の運動など生命維持に深く関わる物質です。多すぎても少なすぎても細胞や臓器の機能が低下し、命にかかわる重篤な状態となることもあります。
尿酸	動物性食品などに含まれるプリン体という物質からできており、通常は老廃物として尿に排泄されます。尿酸が高くなると、痛風発作をおこしたり、さらに進むと腎障害を引きおこす場合があります。

腫瘍マーカー・甲状腺機能検査・心機能検査	
CEA	主に消化器系の癌で高値となります。また、肺癌・乳癌・卵巣癌・子宮癌などや、喫煙者でも高値となる場合があります。
AFP	主に肝臓癌で高値となります。また、急性肝炎・慢性肝炎・肝硬変などや、妊娠中でも高値となる場合があります。
CA19-9	主に膵臓癌・胆のう癌で高値となります。また、他の消化器系癌や、急性膵炎・胆のう炎・閉塞性黄疸・肝硬変・婦人科及び呼吸器疾患などでも高値となる場合があります。

腫瘍マーカー・甲状腺機能検査・心機能検査	
CYFRA	主に肺癌で高値となります。肺癌の中でも扁平上皮癌、腺癌、大細胞癌などの非小細胞癌で陽性率が高くなります。卵巣癌でも高値となる場合があります。
ProGRP	主に肺癌で高値となります。肺癌の中でも肺小細胞癌で陽性率が高くなります。
CA15-3	主に乳癌で高値となります。
CA125	主に卵巣癌で高値となります。また、子宮内膜症や子宮腺筋症で高値となる場合があります。
PSA	前立腺癌で高値となります。前立腺肥大症でも高値となります。
TSH	甲状腺機能を調べる検査です。甲状腺機能が低下すると高値となり、亢進すると低値となります。
FT3・FT4	甲状腺ホルモンの量を調べる検査です。甲状腺機能亢進症(バセドウ氏病)では高値となり、甲状腺機能低下症(橋本病)では低値となります。
NT-proBNP	主に心臓の心室から分泌されるホルモンで、心臓の機能が低下し、心臓への負担が大きいほど高値となります。

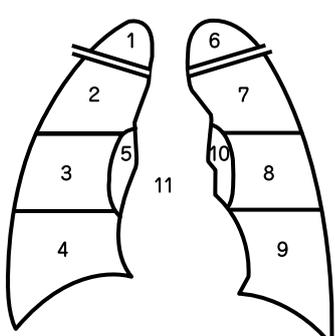
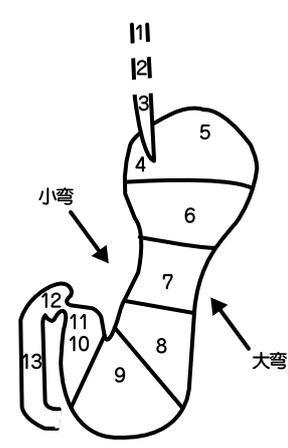
消化管	
べんせんけつ 便潜血	下部消化管からの出血を調べる検査です。陽性的場合、大腸ポリープ・大腸癌・憩室炎などが疑われます。
きんこうたい ピロリ菌抗体	胃がんや胃・十二指腸潰瘍と関連の深いピロリ菌に対する抗体の有無を調べる検査です。陽性的場合、ピロリ菌に感染している可能性があります。ただし、過去の感染によっても陽性となることがありますので、現在の感染を確認するには他の検査と総合して判断する必要があります。
ペプシノーゲン	血液中のペプシノーゲンという物質を測定して胃粘膜の萎縮の程度を調べる検査です。萎縮が進むと胃炎やポリープ、胃癌などの発症率が高くなります。

PET 検査	
せいりてきしゅうせき 生理的集積	正常部位へPET検査で使用する薬剤が取り込まれることがあり、これを生理的集積といいます。脳・腎臓・尿管・膀胱・心筋・胃・大腸・子宮内膜・精巣・筋肉・褐色脂肪細胞(下記参照)などにおこりやすいですが、特に病的なものではありません。
はんのうせいしゅたい 反応性腫大	細菌やウイルスなどの感染から生体を防御するためにリンパ節が腫大している状態のことです。
かっしょくしぼうさいぼう 褐色脂肪細胞	体内の余分なカロリーを熱に変換し、放出させる働きがある脂肪細胞のことです。褐色脂肪細胞は寒いときに活発になり、PET上で生理的集積を示す場合があります。特に頸部～肩甲骨の周りに集積しますが、特に病的なものではありません。

頭部 MRI	
はくしつびょうへん 白質病変	大脳の深い部分に信号変化を認める病変です。軽度であれば正常な加齢変化と考えられますが、高度の場合は細動脈病変や微小な梗塞を含むことがあります。
ふくびくうえん 副鼻腔炎	副鼻腔の粘膜が炎症をおこし、膿や粘液が排出されずに溜まっている状態です。鼻づまりなどの症状のほかに、顔面痛・頭痛・頭重感などがある場合があります。
まくかほう クモ膜下のう胞	頭蓋内に水分の溜まった袋状の空洞です。先天的に存在するものがほとんどです。大きくなりすぎて脳を圧迫している場合以外は特に問題ありません。
こうそくびしょうのうこうそく ラクナ梗塞(微小脳梗塞)	脳の細い血管(動脈)が詰まって起こる小さな脳梗塞です。神経症状・自覚症状のないものを無症候性脳梗塞といいます。高血圧・糖尿病などによる動脈硬化が原因となることが多いです。
のういしやく 脳萎縮	脳が萎縮している状態です。加齢による生理的なものがほとんどですが、外傷・脳血管障害・変性疾患などが原因となる場合があります。
のうどうあくりゅう 脳動脈瘤	脳動脈の一部がこぶ状にふくらんでいる状態をいいます。大きくなると、神経を圧迫したり、破裂してクモ膜下出血をおこす場合があります。
きょうしょうか きょうさく 狭小化・狭窄	脳の血管が動脈硬化などにより狭くなっている状態です。アーチファクト(下記参照)などが原因で血管が狭小化しているように見える場合もあります。
ていけいせい 低形成	脳の血管の一部が生まれつきない場合や、細いために画像上で描出されていない状態です。特に病的なものではありません。
アデノイド	のどの奥にあるリンパ組織で、咽頭扁桃のことです。アデノイド肥大が原因で、鼻・耳・のどなどに慢性的な炎症をおこす場合があります。
あんくどうしゅう トルコ鞍空洞症	トルコ鞍内にクモ膜下腔が伸展し下垂体が圧排されている状態です。無症状であることが多く、治療の必要が無い場合がほとんどです。

頭部 MRI	
アーチファクト	体動や体内金属（インプラントや避妊リングなど）により生じた障害陰影のことです。病気とは関係ありませんが、その部位は読影が困難となります。

骨盤部 MRI	
らんぞう しゅ 卵巣のう腫	卵巣に液体が溜まった袋のようなものができた状態です。大きさは様々ですが、ほとんどの場合は良性です。
しきゅうきんしゅ 子宮筋腫	子宮にできた良性の腫瘍です。成人女性の20～30%にみられます。過多月経や貧血・下腹部痛を伴う場合があります。
しきゅうないまくしゅう 子宮内膜症	本来子宮の内側にしか存在しないはずの子宮内膜組織が、子宮以外の場所（卵巣・卵管・S状結腸など）にできる病気です。
しきゅうせんきんしゅう 子宮腺筋症	本来子宮の内側にしか存在しないはずの子宮内膜組織が、子宮の筋層内に発生し、増殖する病気です。
ないまくしゅうせい ほう 内膜症性のう胞 (チョコレート性のう胞)	子宮の内側以外から、月経出血により生じた袋状のものができた状態です。悪性腫瘍と合併する場合があります。
なぼつとうぼう ナボットのう胞	子宮頸部に液体が溜まった袋のようなものができた状態です。悪性化することはありません。
きのうせい ほう 機能性のう胞	卵巣周期により、卵胞や黄体に液体が溜まった袋のようなものができた状態です。
ようついしゅう 腰椎症	加齢や慢性的な負担によって、脊椎が変形をおこすことです。腰痛・頸部痛・肩こりなどの症状を引きおこす原因となります。
ふくすい 腹水	腹腔内に溜まった液体のことです。ダグラス窩という腹腔内の最下方に溜まりやすく、子宮内膜症などで腹水が増加する場合があります。
ぜんりつせんひだいしゅう 前立腺肥大症	前立腺が肥大した状態です。加齢と共に増加し、60歳以上男性の40%にみられます。排尿障害をおこす場合があります。
ぼうこうけいしつ 膀胱憩室	膀胱の壁の一部が外方へ突出した状態です。排尿障害の結果として生じる場合があります。
いん すいしゅ 陰のう水腫	精巣の周囲に液体が溜まった状態です。症状のない陰のう腫大の最も多い原因です。

胸部の所見部位名称	食道・胃・十二指腸の所見部位名称																																																
																																																	
<table border="1"> <tr><td>1</td><td>右肺尖部</td></tr> <tr><td>2</td><td>右上肺野</td></tr> <tr><td>3</td><td>右中肺野</td></tr> <tr><td>4</td><td>右下肺野</td></tr> <tr><td>5</td><td>右肺門部</td></tr> <tr><td>6</td><td>左肺尖部</td></tr> <tr><td>7</td><td>左上肺野</td></tr> <tr><td>8</td><td>左中肺野</td></tr> <tr><td>9</td><td>左下肺野</td></tr> <tr><td>10</td><td>左肺門部</td></tr> <tr><td>11</td><td>縦隔部</td></tr> </table>	1	右肺尖部	2	右上肺野	3	右中肺野	4	右下肺野	5	右肺門部	6	左肺尖部	7	左上肺野	8	左中肺野	9	左下肺野	10	左肺門部	11	縦隔部	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>食道上部</td></tr> <tr><td>2</td><td>食道中部</td></tr> <tr><td>3</td><td>食道下部</td></tr> <tr><td>4</td><td>胃噴門部</td></tr> <tr><td>5</td><td>胃底部(胃穹窿部)</td></tr> <tr><td>6</td><td>胃体上部</td></tr> <tr><td>7</td><td>胃体中部</td></tr> <tr><td>8</td><td>胃体下部</td></tr> <tr><td>9</td><td>胃角部</td></tr> <tr><td>10</td><td>幽門前庭部</td></tr> <tr><td>11</td><td>幽門前部</td></tr> <tr><td>12</td><td>十二指腸球部</td></tr> <tr><td>13</td><td>十二指腸</td></tr> </table>	1	食道上部	2	食道中部	3	食道下部	4	胃噴門部	5	胃底部(胃穹窿部)	6	胃体上部	7	胃体中部	8	胃体下部	9	胃角部	10	幽門前庭部	11	幽門前部	12	十二指腸球部	13	十二指腸
1	右肺尖部																																																
2	右上肺野																																																
3	右中肺野																																																
4	右下肺野																																																
5	右肺門部																																																
6	左肺尖部																																																
7	左上肺野																																																
8	左中肺野																																																
9	左下肺野																																																
10	左肺門部																																																
11	縦隔部																																																
1	食道上部																																																
2	食道中部																																																
3	食道下部																																																
4	胃噴門部																																																
5	胃底部(胃穹窿部)																																																
6	胃体上部																																																
7	胃体中部																																																
8	胃体下部																																																
9	胃角部																																																
10	幽門前庭部																																																
11	幽門前部																																																
12	十二指腸球部																																																
13	十二指腸																																																

胸部 X 線検査・CT 検査	
おうかくまくこうい 横隔膜高位	横隔膜が通常よりも上にあがっている状態です。原因として、生まれつきの体質や、腸ガスの増加、内臓脂肪型の肥満など様々です。
むきはい 無気肺	何らかの原因により気管支が塞がり、肺の一部または全体に空気が入らなくなり、肺がつぶれた状態です。
きょうすい 胸水	胸腔部に通常存在しない水が溜まった状態です。
きょうまくひこう きょうまくちやく 胸膜肥厚・胸膜癒着	肺を包む胸膜が厚くなっている状態を胸膜肥厚、胸膜同士が癒着している状態を胸膜癒着といいます。過去に胸膜炎、肺感染症などにかかった場合によくみられます。
しんいんえいかくだい 心陰影拡大	心臓の陰影の幅が胸の横幅の50%よりも大きくなっている状態です。肥満・心不全・心臓弁膜症などの場合にみられます。

胸部 X 線検査・CT 検査	
すりガラス影 ^{えい}	霞がかかったような極めて薄い陰影のことです。肺炎の場合が多いですが、肺がんの初期段階で見られることもあります。
せっかいが こうかせい いんえい 石灰化・硬化性陰影	細菌やウイルスなどによる炎症の痕跡に石灰分が沈着したものです。
はいもんりぞうきょう 肺紋理増強	肺血管・気管支によって作られる樹枝状の陰影が濃くなっている状態です。気管支周辺の炎症や肺腫瘍などの場合にみられます。
せんじょうえい さくじょうえい 線状影・索状影	太さが1～2mmの細い陰影を線状影、2～3mmの太い陰影を索状影といいます。炎症が治った痕跡や胸膜の肥厚、気管支拡張症などの場合にみられます。
せきついぞくわん 脊椎側弯	背骨が、左右どちらかに弯曲していることです。
だいでうみやくかくだい 大動脈拡大	大動脈の径が拡張した状態です。大動脈弁閉鎖不全・大動脈瘤などの場合にみられます。
だいでうみやくせっかいが 大動脈石灰化	大動脈に石灰分が沈着した状態です。動脈硬化などの場合にみられます。
だいでうみやくだこう 大動脈蛇行	大動脈が蛇行して走行している状態です。動脈硬化・大動脈瘤などの場合にみられます。
きしゅせいへんか はいきしゅ 気腫性変化(肺気腫)	肺の袋状構造(肺泡)の壁が破壊・拡張された状態です。加齢や喫煙と関係があり、症状として息切れや呼吸困難が出現します。
ぶら(のう胸) ^{ほう}	肺の袋状構造(肺泡)の壁が破壊・拡張によって、隣接する肺泡と融合して大きな袋状になったもので、一般に直径1cm以上のものをいいます。自然気胸の原因となる場合があります。
りゅうじょうえい 粒状影	5mm以下の顆粒状の陰影で、びまん性に広い範囲にみられることが多い陰影のことです。
しんじゅんえい 浸潤影	肺泡内へ細胞成分や液体成分が入り込んで生じる境界の不明確な陰影のことです。肺炎・肺結核などの肺感染症にみられます。
けっせつえい 結節影	直径3cm以下の円形に近い陰影のことです。原発性肺癌や、他の部位からの転移・結核・肺真菌症(カビでおこる病気)・非結核性抗酸菌症・過去の肺炎・良性腫瘍(過誤腫など)などにみられます。
ちんきゅうせいはいびょうへん 陳旧性肺病変	過去の炎症(肺炎など)が治癒した痕跡のことです。
アテローム ^{ふんりゅう} (粉瘤)	良性の皮膚腫瘍のことです。
あみめじょういんえい 網目状陰影	肺間質(肺の袋状構造[肺泡]の壁間のこと)や周りの小葉間結合織が肥厚している状態です。肺線維症(間質性肺炎)・サルコイドーシスなどにみられます。

胃部 X 線検査・胃内視鏡検査	
ポリープ	胃粘膜が“いぼ”のように盛り上がった病変です。
りゅうきせいびょうへん 隆起性病変	粘膜が内腔に突出(隆起)したもので、大きめのものや形がいびつな病変です。
ねんまくかしじょう 粘膜下腫瘍	胃粘膜の下の層から発生した腫瘍性の病変です。
かいよう 潰瘍	炎症などにより胃や十二指腸の粘膜に傷がつき、表面がえぐれた状態になっている病変です。
かいようはんこん 潰瘍瘢痕	胃や十二指腸の粘膜にできた潰瘍が治癒し、粘膜が修復してできた傷跡のことです。
バリウム斑・ニッシェ ^{はん}	胃や十二指腸の粘膜面にできたへこみにバリウムがたまっている状態のことです。潰瘍や陥凹性病変が疑われます。
まんせいえん 慢性胃炎	胃の粘膜に炎症が慢性的に続く状態のことです。慢性胃炎には胃の粘膜が薄くなる萎縮性胃炎や、粘膜が凹凸になる過形成性胃炎、粘膜が厚くなる肥厚性胃炎などがあります。
せいえん びらん性胃炎	胃の粘膜がただれた状態(びらん)になったもので、幽門前庭部(胃の出口の近く)に多く、たこいぼ状の盛り上がった小隆起と小さな陥凹からなる病変です。
しょくどうれっこう 食道裂孔ヘルニア	胃の一部が、横隔膜にある食道裂孔という部分を越えて胸腔内に入り込んだ状態です。
バレット食道 ^{しょくどう}	食道下部の粘膜が扁平上皮から円柱上皮(主に胃や腸の粘膜)に変化した状態です。
けいしつ 憩室	消化管の壁の一部が袋状に外部へ突出した状態です。生まれつき存在する場合もあり、特に病的なものではありません。

腹部超音波検査・CT検査	
ほう のう胞	液体の溜まった丸い袋状のものです。先天的に存在する場合もあり、心配いりません。
しゅりゅう 腫瘍	臓器に出来た「できもの」や「瘤(こぶ)」「はれもの」などの総称のことで、「しこり」とも呼ばれます。
しゅよう 腫瘍	身体の組織や細胞が病的に増殖したもので、良性腫瘍と悪性腫瘍に大別されます。良性か悪性かの鑑別のためには、精密検査が必要です。一般的に「がん」と呼ばれているのは「悪性腫瘍」です。
ほうないしゅりゅう のう胞内腫瘍・ ほうないしゅよう のう胞内腫瘍	のう胞内部に隔壁(しきり)や石灰化などがあるものを「のう胞性腫瘍」、のう胞の壁や隔壁が厚かったり、内部に腫瘍成分がある場合は「のう胞性腫瘍」といいます。のう胞性腫瘍はほとんどが良性ですが、のう胞性腫瘍は悪性の可能性がありますので、鑑別のためには精密検査が必要です。
びょうしゅつふのう 描出不能	胃・腸内のガス、肥満や内臓脂肪などの影響で、超音波が対象臓器まで届かず、十分に描出できていない状態です。これは異常ではありませんが、描出できなかった部分の評価ができていません。身体の状態次第では、次回検査時に観察できる場合もありますが、気になる方は、ガスや脂肪の影響を受けにくい腹部CT等の検査をお勧めします。
たん けっせき たんでい 胆のう結石・胆泥	胆のうの中にできた石、いわゆる胆石です。胆石の中でも大きさが細かく、泥状のものを胆泥といいます。胆のう炎や胆管炎の原因となり、腹痛や発熱などの症状が出る場合があります。
たん 胆のうポリープ	胆のうの粘膜が局所的に隆起した状態です。ほとんどがコレステロールの塊です。10mmを越えるポリープでは悪性の可能性があるため、精密検査が必要となることがあります。
たん せんきんしゅしゅう 胆のう筋腫	胆のうの壁が厚くなる良性腫瘍の一種です。悪性との鑑別が困難な場合は精密検査が必要となることがあります。
しほうかん 脂肪肝	肝臓に過度の脂肪が溜まった状態です。原因としては、肥満やアルコールの摂り過ぎなどが考えられます。アルコール性の脂肪肝は肝炎や肝硬変へ移行しやすいといわれています。
かんないせつかいか 肝内石灰化	肝臓の細胞や組織にカルシウムが沈着した状態です。肝臓に何らかの病気(感染症、炎症など)があり、治った後にできます。ほとんどの場合は問題ありません。
かんけつかんしゅ 肝血管腫	肝臓の中の非常に細い毛細血管が一部増殖して毛玉のように固まってできた良性の腫瘍です。初めて指摘された場合や大きさによっては、精密検査が必要となることがあります。
じんけっせき じんないせつかいか 腎結石・腎内石灰化	腎臓の内部にカルシウムが沈着した状態です。石灰化は尿路の外にできるので症状はありませんが、結石は尿路の中にできるため、痛みや血尿の症状がでる場合があります。
じんけつかんきんしほうしゅ 腎血管筋脂肪腫	腎臓にできる良性の腫瘍で血管・筋肉・脂肪成分からできています。サイズが大きい場合や腎臓癌との鑑別が困難な場合は精密検査が必要となることがあります。
じんうかくちょう すいじんしゅう 腎盂拡張・水腎症	腎臓内の尿の出口である腎盂という部分が拡張している状態で、さらにその状態がひどくなったものを水腎症といいます。原因としては尿管結石や腫瘍などがあります。
すいけっせき 膵結石	膵臓の内部にカルシウムが沈着した状態です。慢性膵炎などによって起こります。
すいかんかくちょう 膵管拡張	膵臓から十二指腸へ通じている膵管が拡張している状態です。慢性膵炎や膵癌などによって起こります。
ひしゅ 脾腫	脾臓が大きくなっている状態です。肝疾患・貧血や白血病の血液疾患・感染症などでみられます。

頰動脈超音波検査	
ないちゅうまくのこう 内中膜肥厚	頰動脈の内側の壁(内中膜)が厚くなっている状態です。動脈硬化が進むにつれ厚くなっていきます。
ブランク	血管の壁にコレステロールなどが溜まってできた限局性の隆起のことです。進行すると血管の内腔が狭くなり、血液の流れが悪くなるため、脳梗塞を引き起こす場合もあります。ブランクは性状により、石灰化・等輝度・低輝度、さらに均質型・不均質型に分けられ、低輝度ブランクはもろく崩れやすいため、脳塞栓症の塞栓源になりやすいといわれています。

甲状腺超音波検査	
しゅりゅう 腫瘍	甲状腺にできるしこりで、良性のものと悪性のものがあります。
ほう のう胞	液体の溜まった丸い袋状のものです。先天的に存在する場合もあり、心配いりません。
しゅたい 腫大	甲状腺が大きくなっている状態です。甲状腺の機能異常や甲状腺炎が疑われます。
ないふふきんしつ 内部不均質	甲状腺の内部が不均一に観察される状態です。甲状腺の機能異常や甲状腺炎に特徴的な所見です。

前立腺超音波検査	
せっかいが 石灰化	カルシウムなどが沈着したもので、症状はなく特に心配いりません。加齢性変化である場合が多いです。
ひだい 肥大	前立腺が大きくなっている状態です。進行すると残尿感や排尿障害などの症状がでる場合があります。

心臓超音波検査	
だいどうみやくへいきふせん 大動脈弁閉鎖不全	大動脈弁(左心室と大動脈を隔てる弁)が完全に閉じないため、血液が左心室へ逆流する状態です。
そうぼうべんへいきふせん 僧帽弁閉鎖不全	僧帽弁(左心房と左心室を隔てる弁)が完全に閉じないため、血液が左心房へ逆流する状態です。健康な人でも少量の逆流がみられる場合があります。

乳房超音波検査・マンモグラフィ検査	
にゅうせんしやう 乳腺症	30～40代の女性によくみられる良性疾患です。乳腺のしこり・張りや痛み・乳頭異常分泌などの症状があります。女性ホルモンに影響されておこります。
にゅうせんしやう 乳腺腫瘍	乳腺内に存在する様々な塊の総称をいいます。ほとんどは良性といわれていますが、悪性との鑑別が困難な場合は精密検査が必要となることがあります。
にゅうせん ほう 乳腺のう胞	乳腺内にできる液体の溜まった袋状のものです。症状はほとんどありませんが、大きくなると、“しこり”として触れます。また、急に大きくなったり炎症を伴うと痛みを感じる場合もあります。
せんいせんしや 線維腺腫	20～30代の若い女性に多い良性の腫瘍です。特に痛みはなく、触るとよく動くのが特徴です。原因は不明ですが、女性ホルモンであるエストロゲンの過剰分泌が関係しているといわれています。
にゅうかんかくちやう 乳管拡張	乳管内に分泌物がたまり、乳管が拡張した状態です。月経周期のホルモン変化によるものや妊娠・授乳によるものなど病的ではないことも多いですが、炎症や腫瘍が関係している場合は精密検査が必要となります。
にゅうとういじやうぶんびつ 乳頭異常分泌	乳頭から分泌物が出ていることで、妊娠中や授乳期以外のものを異常分泌といいます。分泌物の量・出方・色で判断します。

HPV (ヒトパピローマウイルス)	
HPV	HPVには多くの種類があり、癌化する型(中～高リスク型)としないもの(低リスク型)があります。中～高リスク型と言われるHPVの感染が長期間続くと子宮の細胞が変化して前癌状態となり、さらに子宮頸がんへと進行していく危険性があります。結果が陰性(-)となった場合でも子宮頸がんの早期発見・早期治療のために細胞診検査を定期的に受けることをお勧めします。

子宮細胞診 (頸部)					
スメアテスト分類					
NILM		異常なし	ASC-US	軽度異型上皮疑い	
腺系異常	AGC	腺異型または腺癌疑い	扁平	ASC-H	中等度～高度異型上皮疑い
	AIS	上皮内腺癌	上皮系	LSIL	ヒトパピローマウイルス感染を伴った軽度異形成
	adenocarcinoma	腺癌	異常	HSIL	中等度～高度異形成または上皮内癌
	Other malig.	その他の悪性腫瘍		SCC	扁平上皮癌

